説教要旨『赦されることの少ない者は』

ルカによる福音書 7 章 36～50 節

あるテレビドラマの医療裁判を見て、改めて考えさせられたことがあります。新薬投与を境に、患者の容態が急変して亡くなったことを受け、遺族が違和感を感じ、起訴するという設定です。原告側は、「医は仁術」という観点から、新薬を投与した医師が、普段から患者の命を実験台のように扱っている現実を問題視しました。一方、弁護側は「医は科学」という観点から、その医師が難病治療に対して研究熱心であったことを証明し、患者の死の一つ一つが医療を進歩させてきた現実を指摘します。当然、原告側は、科学であれば人の命を殺して良いはずはなく、科学で人の命の価値を推し量れないと反論します。一方弁護側は、誰しもが医学の進歩のための犠牲を暗黙の内に了解し、その恩恵を受けていながら、いざ、その犠牲が自分や家族にふりかかったとき「話が違う！」と訴えていく人間の現実を指摘します。どちらの主張も、頷けます。「正しい者」には成りきれない現実のなかを、私たち人間は生きているのだと思います。

本日の聖書箇所には、シモンとイエスが食事をしていた所に、町で「罪深い女」として知られていた者が入ってきて、イエスの足に涙を流し、接吻し、香油を注ぐという場面が記されています。シモンは、その女性のするがままにさせているイエスを見て、「この人が…だれで、どんな人か分かるはずだ。罪深い女なのに」（39節）と感じています。まるで、「自分にはこの女性がどんな人か全部分かっている」かのような言い草です。そのシモンに対してイエスは、「この人を見ないか」（44節）と呼びかけられました。この女性を、イエスの見ている世界観のなかで、もう一度「見ないか」と促されているのです。シモンは、この女性を過去においてしか、罪深さでしか、肉眼で映るままにしか見ていません。それ故に、女性の行為からにじみ出ている愛、「この人が多くの罪を赦されたことは、わたしに示した愛の大きさで分かる。赦されることの少ない者は、愛することも少ない」（47節）とイエスが語られた世界が見えていません。もちろん、たくさん赦されるために、たくさん罪を犯して良いということではありません。“すでに”人は、多くの罪を赦されて生きているのであって、求められるのはそれに対する深い自覚です。シモンには、自分自身が赦されて生きている現実が見えていなかったのです。

人や物事の真実を狭めて捉えてしまう私たちです。「（もう一度）この人を見ないか」というイエスの呼びかけに応えつつ、神は「私」だけでなく「あの人」とも共にいる、「天にまします“我ら”の父よ」という眼差しを持って、「主よ、見えるようにしてください」と祈り求めるものでありたいと願います。

（文責：望月達朗牧師）